**世阿弥研究会9月8日**

①葉山神社御社殿竣工奉祝祭・ご奉納能舞最終公開稽古（鎌田先生・河村先生）

②『花習』最終回

* 「序（シンプルですっと入り易い仕立て）・破（幽玄な密度の高い魅せどころ）・急（激しく短いフィナーレ）」のリズムは、宴の席から勝負の舞台まで、いつでも心得ておくべきである。機転を利かせ、上演の場の運びに合わせることが肝心である。
* 「秘伝」である故は、途中入場の観客へのサーヴィスといった、上演者として一番生々しい手の内を語る「惹き込み戦術」だから。

・（今回の最終稽古は「歌舞」いていたという感想を受けて）

「能から歌舞伎が生まれた」という話題

→能は代々上流階級に庇護されて洗練されてきた。転換点となったのは、桃山時代、物狂い的に「ややこ踊り」「かぶき踊り」を舞った出雲阿国である。切実な悲しみや怨念を表現する「当事者」の荒々しい祈りのような舞。ここから歌舞伎が始まった。ここからどんどんエンターテイメント化して様式化されていく。聖から俗へ。

* （今回の奉納舞が「新しい神楽」を目指しているということについて）

“新しさ”といっても、阿国的な身に迫るような切実な“聖”が垣間見られることが大切。今回の奉納舞も、河村先生扮する「荒御霊」で始まり「翁」で終る。

→芸術は荒御霊、物狂い的な側面のみでは成り立たない。「泣き叫び」が「歌」になるには、コトバにならない情念を媒介する転換の「ワザ」が必要。感情に触れつつも距離をとるための「ワザ」。

→芸術は当事者の依り代・普遍的に深まった感情の表現である。凶暴とも思えるほどの情念を、そのままではなくて代弁できる形式、エンタメ性が必要になる。

* 現代芸術の様々な傾向

 　　市川染五郎主演の歌舞伎「鯉つかみ」（2015年8/14～16）について

　→プロジェクションマッピングなど現代の技術を駆使した演出。その時代

　にできることをフルに活用して魅せるのが「歌舞伎」

「ふくしま未来神楽」での詩人・和合亮一さんの言霊について

→大災害の当事者の自作自演の生々しさが、他の人によって語り継がれた時、芸術になって行くのではないか。あまりにも強烈で凄絶であった。しかし、それが神楽の根源に繋がるようにも思われた。イサチル・・・物狂い・・・暴力・・・スサノ精神（鎌田先生印象）

　→当日に少女の朗読した詩は、和合さんの作品であるが、淡々と語られており芸術

　　を感じた。

　「スサノオの到来」展(@渋谷区立松濤美術館)について

　→講演会のときに、部屋に入りきらないほどの盛況ぶり…スサノオ的なものへの関心

　　がますます高まっている。

* 世阿弥の『花習』は、能楽の「祈り・奉納」としての聖なる原型的側面と、娯楽としての俗の側面の両極をまたぎ、どちらも大切にしていく重要性を後世に伝えている。

文責：門前斐紀

（木村先生、門前メモを元に）